

## 『山路の露』伝本研究

——二類本九本の位置付けについて——

岡 陽 子

はじめに

『源氏物語』の続編として書かれた『山路の露』の伝本は、物語後半に見られる大きな異同から二系統に分けられることが、本位田重美氏によって指摘されている。<sup>1)</sup> すなわち、いわゆる『絵入源氏物語』<sup>2)</sup>の附録の刊本およびその写しを中心とした系統(一類本)と、写本のみで伝わる系統(二類本)とに分けられるのである。

従来は専ら、二系統のどちらが原形に近いか、という問題が議論されてきた。早くに山岸徳平・今井源衛両氏が二類本のうち六本の大きな特徴を述べられ、前田家尊経閣文庫蔵本を「比較的善本」と認めた上で、さらに詳細な検討の必要性を提言されたもの<sup>3)</sup>の、伝本個々の特色や相互関係に関する考察はいまだなされていない。

伝本研究が進みにくい最大の要因は、東海大学桃園文庫蔵本(九条穂通筆)および祐徳稻荷神社中川文庫蔵本(鍋島直郷筆)以外の

伝本には奥書がなく、書写者や伝来が定かではないという点にある。また二類本に関して言えば、伝本相互間に一行ないしは二行にわたるような比較的大きな異同があり、最善本を想定しにくいという点が挙げられよう。

しかし、どのような角度からにせよ本物語の研究を行う上では、伝本研究によって二系統の成立をはじめ諸本の位置付けを確認することが不可欠であろう。またそのために、まずは二類本の写本それぞれがいかなる過程を経て成立したのか、という点での考察が欠かせない。さらに、刊本が普及して以後も綿々と二類本が書写されたという事実を考えても、本物語がどのように流布したのか、その様相を追求することも研究の一側面として重要であろうと考える。

このため、本稿では二類本諸本の伝流過程を明らかにしたい。諸本間の異同に着目して本文の様相を見比べることににより、伝本それぞれの特徴および相互関係を検討する。

## 一 大きな本文異同から見た伝本群の想定

本稿で扱う伝本は次の九本である。

- ①前田家尊経閣文庫蔵本（前田本・前）
- ②東海大学桃園文庫蔵九条種通筆本（九条本・九）
- ③筑波大学附属図書館蔵本（筑波本・筑）
- ④祐徳稲荷神社中川文庫蔵本（祐徳本・祐）
- ⑤故本位田重美氏蔵甲本（本甲本・本甲）
- ⑥故本位田重美氏蔵乙本（本乙本・本乙）
- ⑦京科大学附属図書館蔵本（京大本・京）
- ⑧宮内庁書陵部蔵甲本（書甲本・書甲）
- ⑨島原図書館松平文庫蔵本（松平本・松）

従来二類本は八伝本とされていたが、改めて調査したところ③筑波大学附属図書館蔵本も同様の特徴を備えていることが判明した。また、本位田氏の御著書頭注でその一部が知られるのみであった⑥故本位田氏所蔵乙本についても、御遺族の御厚意により原本を確認できたため、本稿では現在二類本と認められる伝本九種すべてを対象として考察する。なお煩を避けるため、以下、各伝本に付した通し番号と（ ）内の略称とを用いて伝本名を示す。

さて、諸本の関係について考察する前に、各伝本に見られる大きな本文異同（主に欠落箇所）を確認しておく。個々の独自異文の多

少を見ることでそれぞれの本の性格の一端を知り得ようし、その共有関係を見ることで諸伝本を大まかに分類することも可能と考えられるからである。なお、②九条本・③筑波本・⑤本甲本・⑧書甲本には独自の大きな本文異同は見られないことをあらかじめ指摘しておく。また、参考資料として諸伝本の独自異文および共通異文の数量を本稿末尾の「表1」～「表4」に示す。

\*本文の掲出は①前田本により、その所在を（ ）内に丁数およびその表裏の別・行数の順に示す。それぞれの伝本が異同を持つ部分には傍線を付す。（以下、特に断らない限り本文の引用はすべて同じ）

### 【資料1】

①前田本の独自異文 \*（ ）内が欠落。欠落部分は②九条本による  
・かほりいて、へた、ちかきなるへしこのはしつかたに

（十七ウ・8）

・こはいかなるへ事にかとたふれふしぬれは思ひつること、かなしくて（三十二ウ・2）

・あやしかりなんへさりとてかの山あかきすまるにもとちめはてられんむも心くるしきを（四十九オ・9）

④祐徳本の独自異文 \*傍線部分が当該伝本の欠落。以下、諸本同じ。

・いとあはれなりさたすきみにくき人たにが、るさまになりぬれは（四十ウ・1）

⑦京大本の独自異文

・そのかひなくさふらひところなりけるをのことも、みなお

きいて、ゆ・しとくまいりたまへる物かなといふも

(十三ウ・1)

・おほすらめどの給ふにうかりしすちのごとすこしかすめたまふをさくかみしうはつがしういと、いふへき(二十一オ・3)

・なからへであるにもあらぬうつ、をはた、そのま、の夢になしてよほのかにまきはしたるも(二十一オ・8)

・まいりたれはれいより人すくなにしめやかにてはしつかたにみすまきあけて笛ふきささひて(四十五ウ・7)

### ⑨松平本の独自異文

・あかつきのそてならひたまへりやまたこそしらねどのたまふにつゆふかき山ちをわけぬ人たにも秋のならひのそてそしほる、

(二十五オ・2)

・めやすしとおほしけりかのゆふかほの君の右近はけふりをみんとのおたまひしさしらへをたに(二十八オ・4)

・いふかひなき御さまにさへなりたまひにければいと、心ちまといわたるいひつ、けて(三十六ウ・2)

・あるまじきこと、をしみきこえて過し侍りしをしかるへきことにや(三十九オ・7)

・わする、世なくあはれに心ふかくおほし入つ、うこんなどまでたつねかすまへ給ふもた、(四十一ウ・4)

・さりとあはれとはおほしなんかしなとかたらはせ給おりく

侍るにもけにこそあはれに(四十二オ・6)

まず四伝本には目移りや不注意による脱落とおほしき箇所が存在する。特に⑦京大本・⑨松平本はその数も多く、【表1】のように細かな独自異文も多い点に注意しておきたい。

次に複数伝本に共通する大きな異文を確認する。

### 【資料2】

A ③筑波本・④祐徳本・⑤本甲本・⑥本乙本の共通異文

・物ともさま(五十オ・2)

\*波線部が共通補入

物ともみつがらの御れうきぬわたなどやうのものさま(

③筑波本・④祐徳本)

物ともみつがらの御れうきぬわたなどやうの物さま(

⑤本甲本・⑥本乙本)

B ③筑波本・④祐徳本・⑥本乙本の共通異文

・さりとあはれとはおほしなんかしなとかたらはせ給おりく

侍るにもけにこそあはれにみたてまつり(四十二オ・6)

・しのひてまいるへくのおたまひてなとつかはしければいみしうよ

ろこひ(二十八オ・1)

いみしうがたしげなしとてまいりぬ(③筑波本・⑥本乙本)

いみしうがたしげなしとて参ぬ(④祐徳本)

C ⑦京大本・⑧書甲本・⑨松平本の共通異文

・ことどもをやつひ給ひてしこと、もこそ(二十三ウ・1)

・おはすへかめれあさましき御いろのふかさなりやなとくちく  
さ、めきけりけしからぬ思ひやりなり (二十四オ・三)

・御めくみをよろこひ思ひ給ふ心ふかけれともきこえさせんに  
(三十一オ・五)

・かくろへ給しあやしきやとはおほえさせたまふや所はひろく  
(四十二ウ・八)

D ⑧ 書甲本・⑨ 松平本の共通異文

・みちのほともさなからうつ、ともおほえすうれしともあさまし  
ともいまそかのもの、けの (四十五オ・七)

・人のいふなるとしのくれかきりのたいめんも (五十二オ・一)

A ③④⑥のみが共通して持つ記述があることが確認できる (詳しく  
は後述するが、他本の脱落ではなくこれら四本の挿入と考える)。

さらにこのうち B ③④⑥の三本に共通異文がある。同様に、C ⑦⑧⑨には四箇所  
の共通欠落、さらに三本の中でも D ⑧⑨に二箇所の共通欠落が確認できる。  
これらのことから、A の中でも ⑤と B ③④⑥との間に、C の中でも ⑦と D ⑧⑨との間に、それぞれ距離があるこ  
とがうかがえる。

また【資料 1】の独自異文と合わせて考えると、九伝本の中でも

② 九条本のみが、単独・共有を問わず特に大きな本文異同を持たないことが確認でき、善本といえる。なおこの②は【表 2】から①前田本と密接な関係にあることがわかる。①が山岸・今井氏によつて

「比較的善本」と認められていることを考え合わせると、この①②の近接する二伝本が諸本の中でも優位にあることがうかがえよう。

以上より、大きく次の三群を想定できるのではないだろうか。

I ①前田本・②九条本

II ③筑波本・④祐徳本・⑥本乙本 / ⑤本甲本 …… A

III ⑦京大本 / ⑧書甲本・⑨松平本 …… C

さらに、【表 4】によれば (②九条本・③④⑥) および (⑤・⑦) という近接した関係がそれぞれ確認できる。すなわち三群のうち I と II の中間に ②九条本、II と III の中間に ⑤本甲本が認められるのである。以下この想定に基づき、諸伝本の関わりを検討する。

二 前田本・九条本の関係

まず I (①前田本・②九条本) について確認する。

【資料 3】①前田本・②九条本の共通異文

(1) 心うかるへしおもひし人 (六ウ・八)

心うかるへしと (③筑・④祐・⑤本甲・⑥本乙・⑦京・⑧書  
甲・⑨松)

(2) かひあるましきなめり物ゆへ (三十七オ・八)

める (③筑・④祐・⑥本乙・⑦京・⑧書甲・⑨松)  
めり (⑤本甲)

(3) たまのうてなのめうつしいと、しなくしからぬ心ちして

いとくしなくしからぬ(②九)

いと、しなからぬ(③筑・④祐)

いと、しからぬ(⑤本甲・⑦京・⑧書甲・⑨松)

しななからぬ(⑥本乙)

それぞれ(1)は誤脱、(2)は誤写をこの二本が共有する例であり、二本の近さが見てとれる。

ここで問題としたのは(3)である。常陸介郎へ赴いた右近が「玉の台」すなわち薫郎との落差を感じたことが示されるのだが、①前田本・②九条本が「品々しからぬ」と記すのに対し、他本では「いとどしからぬ」あるいは文意不明な語句を記す。このうち「品々し」は、「源氏」で次のように用いられている。

a みづから(「浮舟母」)ばかりは、ただひたぶるに品々しからず人げなう、たださる方にはひ籠りて過ぐしつべし、この御ゆかり(「八宮ノ親戚筋」)は、心憂しと思ひきこえしあたりを、睦びきこゆるに、便なきことも出で来なば、いと人笑へなるべし。

(東屋⑥七七)

b (浮舟八) だだいとつつましげにて、ひたみちに恥ぢたるを、(薫ハ) さうさうしう思す。あやまりてかうも心もとなきはいとよし、教へつつも見てん、田舎びたるされ心もつけて、品々しからず、はやりかならましかばしも、形代不用ならまし、

と思ひなほしたまふ。(東屋⑥九九)

c (浮舟母カラノ) 迎への人來たり。車二つ、馬なる人々の、例の、荒らかなる七八人、男ども多く、例の、品々しからぬけはひ、さへづりつつ入り来たれば、人々かたはらいたがりつつ、「あなたに隠れよ」と言はせなどす。(浮舟⑥一三〇)

用例は三例のみ、いずれも浮舟物語に見られる。まずbでは薫が浮舟に対し、品がなく先走って落ち着かない人であったら大君の代わりにはなるまい、と考えている。ここでは浮舟が「品々しからぬ」人でなくて良かった、と評されるのであるが、残り二例は、a浮舟母・c常陸介の従者たちがそれぞれ「品々しからぬ」人であると表現される。すなわち「源氏」において「品々しからず」とは、都人に比して東人を卑しむ、浮舟物語特有の評価語といえよう。そして、これを承けて「山路の露」でも、今は薫(「都人」)の側に属する右近が、常陸介(「東人」)を「品々しからず」と卑しんでいると読むべきではないだろうか。つまりここは①前田本・②九条本の表現が原形であり、他本はいずれも誤写・誤脱を起こした表現と考えられるのである。①②の優位性が確認できよう。

では、①前田本と②九条本とはどう関わるのであろうか。【資料1】で確認したように、①には大きな独自異文が三箇所ある。一見全て①の誤脱に見えるが、このうち一例目は前後の文章をも考慮すると、必ずしも誤りとはいえないことがわかる。問題となる一節を

②によって補うと、次のようになる。

のきちかき萩のひろこりたるもとにたちかくれてみ給へはこな  
たは仏の御まへちかきなるへし名香のおかくかほりいて、  
（た、ちかきなるへし）このはしつかたにおこなふ人あるに  
やきやうのまさかへりたる音もしのひやかになつかしうきこえ  
てしめくと物あはれなるに（十七ウ・6）

薫が隠れて屋内を窺う様子を心情に即して描いたものであるが、傍線部のように、当該箇所Bの直前に類似した表現があることがわかる。Aでは、屋内を窺うとそこは「仏の御前」に近いようだ、と判断する。そして続くBを見ると、「名香」によって近さを判断するのであるが、では何の近さであろうか。「仏の御前」あるいは続く「おこなふ人」すなわち浮舟と解せないわけでもないが、A・Bが重複してはどちらにせよ不自然であろう。つまりここは①前田本の誤脱ではなく、他本の誤った挿入の可能性が高いと考えられるのである。ちなみに、当該箇所の一類本は次のようになっていいる。

軒ちかきときは木の、所せくひろりたる下に、たちかくれて  
み給へば、こなたは佛の御前なるべし、みやうがうのかいとし  
みふかくかほり出て、たゞこのはしつかたに、をこなふ人ある  
にや、経のまさかへさる、をとも、しのびやかになつかしきき  
こえて、しめくともの哀なるに（引用は承応三年刊本による）

傍線部の表現は二類本と異なるが、文脈は①に近いといえよう。

また次のような例からも①前田本の位置が確認できる。

【資料4】①前田本の独自異文

(1) みつからもしのひてそ、のかしきこえしかとも物うけにおほし  
たりしかは（三十九ウ・2）

物のけ（②九・③筑・⑦京・⑨松）・もの、け（④祐・⑧書

甲）・物、け（⑤本甲・⑥本乙）

(2) さるへからんおりによきさまにけひし給へ（三十一オ・7）

ひんき（②九・③筑・⑤本甲・⑥本乙・⑦京・⑧書甲・⑨

松）・ひひき（④祐）

(1)では小野の尼君が初瀬詣を思い立って誘ったけれども浮舟は留守居をした、と語られている。ここで初瀬詣を断った心情を①前田本が「ものうけに」思ったからとすのに対し、他本は「物の怪に」思ったからとしており、明らかに他本の誤りと認められよう。

次に(2)は右近に対して常陸介が薫への口添えを頼む言葉で、①前田本では「さるべからんおり」とある箇所を他本は「びんぎ」とする。いずれもしかるべき折、良い機会、ということで大差はないのだが、①が他本に対して孤立していることが認められる。

以上の例から、①前田本が早い段階で他本とは系統が分かれた可能性が高いと考えられる。また、他本の中では②九条本が①に近い位置にあり、①以外の八伝本の中ではより原形に近いといえるのではないだろうか。しかし①は、【資料1】の残り二例が目移りによる

誤脱と推測されるように、独自の誤りもあることから、二類本の祖本を直接の親本として成立したとは考えにくく、一本ないしは数本の転写を経たと見るべきであろう。この想定を仮に図示しておく。

【図1】



次に②九条本の性格を確認しておきたい。大きな異文は存しないが、【表1】のように細かな異文は複数見られる。

【資料5】

(1) ありつる御かへしなくてはいかにのたまはせん(十一ウ・4) のたませ(②九)

(2) なかき夜はさらたにねざめかちなるを(六オ・7)

ねおほえ(②九)

(3) 山かけはくらうなるほどにそゆきつきぬる(八オ・6)

山かけは山かけは(②九)

(1)は、薫がどう言うだろう、という小君の推測で、「のたまはず」という敬語が用いられるのを、②のみが「は」を誤脱する。②の誤脱はこのような一、二字程度が大半である。続く(2)は、おそらく②の親本では「寝覚」と漢字表記されていたのを、「覚」を「おほえ」と読み誤ったのであろう。類例として他本で「おほす」「おほし」とあるのを②のみが「おほえず」「おほえし」とする箇所が全八例

あり、親本の「覚」の字を機械的に「おほえ」と読むことが②の特色といえる。さらに(3)は「山かけは」の衍字である。このような語単位での衍字は②のみに見られるもので、もう一例「御とふらひと」もに御とふらひとにも「御國の」(五十ウ・8)という箇所も存する。

以上のように②九条本には様々な独自異文が認められる。しかし、際だって不可解な文脈も見あたらず、単純な誤写として修復可能な程度のものである。諸伝本の中でも数少ない、書写者が明らかでない本であることを考え合わせても、二類本の中でも善本といえよう。

### 三 筑波本・祐徳本・本甲本・本乙本の関係

続いてⅡ(③筑波本・④祐徳本・⑥本乙本/⑤本甲本)を検討する。まずこのうち③④⑥が近い位置にあることを確認しておく。【資料2】Bの他にも、【表3】のようにこれら三本は細かな異文を多く共有する。さらに三本のうち【資料1】④祐徳本のみが独自の大きな異文を持つことから、③⑥に比べ下位に位置するといえる。これは次の(1)からもうかがえる。

【資料6】

(1) なくくのたまはせければ(三十九ウ・6)

のたまはせてければ(③筑・⑥本乙)

の給はせて(④祐)

(2) わかくしうてまいらせたまはぬなるへし(四十七オ・7)

まいらせ給めぬ(③筑・⑥本乙)

参らせたまはぬ(④祐)

(1)で③筑波本・⑥本乙本は「のたまはせてければ」と「て」を挿入、さらに④祐徳本は「の給はせて」と③⑥から「ければ」を誤脱する。

しかし(2)では④を含め諸本「まいらせたまはぬ」とあるのに対し、③⑥のみが「は(者)」を「め(免)」と誤写する。このような例が複数見られることから、③⑥と④との間に直接の親子関係は認められない。また【表1】③⑥はそれぞれに独自異文を有するため、ここにも親子関係は認められず、兄弟関係にあたと推察される。

それでは③④⑥と⑤本甲本とはどのように関わるのであろうか。まずこれらは【資料2】A、他本にない一節を共有する。一見、他本の誤脱にも見えるが、以下確認するように、いくつかの例については、これらの補入であると考えられる。

【資料2】Aでは、薫から浮舟への冬の贈り物が描かれる。他本はその中身を「様々」と一括するのに対し、これら四本は具体的にありわかりやすいが、果たしてこの具体性が必要かという点、単に「様々こちたうて」でも文意は自然で、あれこれ贈り物をしたことは十分に伝わる。その他にも次のような例が見られる。

【資料7】

(1)いとがたしと思ひいつるに(十一オ・8)

かたしけなし(③筑・④祐・⑤本甲・⑥本乙)

(2)御返なくはいまはおほつかなふはしもてなし給ふなうたてあらん(二十五オ・7)

御返なくはうたてあらん(③筑・④祐・⑥本乙)・御返しなくはうたてあらん(⑤本甲)

\*③④⑥はいずれも二重傍線部「御返なくは」を欠く。

(3)心さまなともよかりしものと(二十七ウ・9)

右近は心さま(③筑・⑥本乙)・右近心さま(④祐・⑤本甲)

(4)山ざと人おほつかなからぬほとに(四十九ウ・9)

山里人いかにとおほしやり(③筑・④祐・⑥本乙)

やまさと人いかにとおほしやりて(⑤本甲)

波線部が他本には存しない本文である。(1)は、浮舟から、自分の生存をなかつたものと薫に伝えよと言われた小君の心情を描く。他本では「かたし」(難しい)と思ったのに対し、③④⑥では「かたしけなし」(おそれ多い)と思ったのに対し、③④⑥では「かたしけなし」(おそれ多い)と思ったとする。描かれる感情は異なるが、文意として不自然ではなく、これはどちらが原形とも判断しがたい。

次に(3)では薫が右近について「性格もよかつた」と思い起こす。③④⑥のように「右近(は)」と主体を明示する方が文意を解しやすいが、この前後はずっと右近について描いており、これがなくとも不都合は生じない。③④⑥が他本をより詳しく描く例といえよう。

また(4)は、山里人すなわち浮舟が不安にならない程度に訪れる、と表現する他本に対し、これら四本では「浮舟がどうしているだろ

うか」と思いやる薫の心情が加わる。しかしこれまで同様、この描写が不可欠なわけではなく、他本の表現でも十分にその意は通じる。

以上のように見ると、③～⑥の共通祖本には、もとの二類本をさらに理解しやすいよう独自に言葉を補ったり入れ替えたりする、いわば本文を改変する傾向があると考えるべきではないだろうか。⑤本甲本は、影印が刊行されていることもあつて、二類本を採る場合は「影印された本位田本によつて調査研究するのが、現今では最善の方法」と言われている。しかし、こういった本文改変の傾向を考えると、慎重に他本と見比べる必要がある。

なお(2)は、薫が浮舟に対し返事を催促する言葉である。③～⑥の本文に特に違和感はないのだが、ここで気にかかるのが、引用本文はじめの二重傍線部「御返なくは」という言葉である。実は、これを③～⑥はみな欠いており、これら四本と他本では「御返なくは」という言葉の位置が異なっていることになる。そこで文意を考えると、他本の場合、「御返なくは」と続く「おほつかなふは」とが、いずれも、薫に対して返事をしない、というほは同意の言葉となり、不自然である。③～⑥の方がすんなりと解釈できる。とすれば、これら四本が原形を保つと考えたくなるが、それでは先に確認した①前田本・②九条本の優位性という結論と矛盾する。なぜこのようなことが起きたのであろうか。その解明の手がかりとなりそうなのが、一類本の本文である。

御返など、今はおほつかなうなどもてなし給ふな、うたてあらん（引用は承応三年刊本による。一類本諸本異同なし）

「御返など」となっており異同があるものの、位置としては①前田本その他と同じである。しかもこの表現であれば、全く違和感が無い。そこで一つの可能性として、「山路の露」の原形は一類本の本文と同様であつたのが、二類本では「御返など」の「と（止）」を「く（入）」と誤写し（「は」は後補ということになるか）、それでは文脈上不自然だと感じた後人が、「御返なくは」を③～⑥の位置へと動かした、とは考えられないだろうか。とすれば、（①前田本その他→③～⑥）という流れが想定できよう。

こういった独自補入以外に目を向けてみても、これら四本には【表4】のように共通する誤脱・誤写が多い。一例を挙げておこう。

ひたすらあましましきみつの音にのみかこちしを（二十八ウ・5）

水のせとのみ（③筑・④祐・⑥本乙）・水の瀬とのみ（⑤本甲）

他本は浮舟の失踪を周囲の人々が荒々しい「水の音」すなわち宇治川の音のせいにした、と表現するのに対し、これら四本は「水の瀬」すなわち宇治川の流れのせいにし、と表現する。この部分は次のような「源氏」の描写が関わっている。

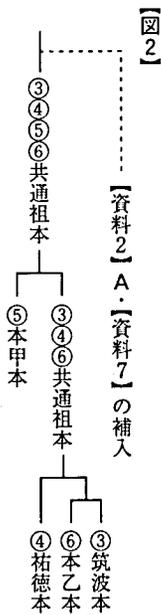
・「亡き影に」と書きすさびたまへるものの、硯の下にありける（侍従ガ）見つけて、川の方を見やりつつ、響きののしる水の音

を聞くにも疎ましく悲しと思ひつつ、（略）（蜻蛉⑥二二〇）

・母君（＝浮舟母）も、さらにこの水の音けはひを聞くに、我も  
まろび入りぬべく、悲しく心憂きことのとまるべくもあらねば、  
いとわびしうて帰りたまひにけり。（蜻蛉⑥二三四）

単なる川の流れではなく、その音に注意を払い浮舟入水と結びつけ  
る周囲の人物の心情が描かれている。とすれば①前田本その他の表  
現が本来であったと見るべきであり、③④⑥は「音（をと）」の「を  
（透）」を「せ（世）」と誤写したものととらえられよう。

以上のことから、これら四本は二類本の祖本とは距離のある、特  
異な一群としてとらえるべきであろう。③④⑥の相互関係をも考慮  
して図示するならば次のようになるうか。



次に、このⅡ（③筑波本・④祐徳本・⑥本乙本／⑤本甲本）とⅠ  
（①前田本・②九条本）との関わりを確認しておく。先に見たよう  
に、この二群の中間的な伝本として②が認められる。すなわち、②  
と③④⑥には次の【資料 8】(1)のような細かな異文の共有が多く、  
近接した伝本群と考えられるのである。

【資料 8】

(1) とりわけひとつにてあなつりならひてしなこり（十二オ・二）

なしわひ（②九・③筑・④祐・⑥本乙）

(2) 雪あられをかけたる御つかひ（五十オ・五）

霰（②九）

霧（③筑）・きり（④祐・⑥本乙）

(3) 春をむかふへき心まうけの物とも（五十オ・二）

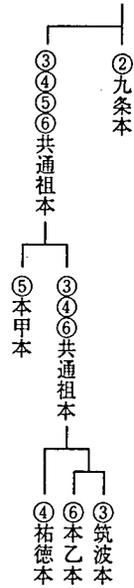
年の暮は春を（③筑）・年のくれは春を（④祐・⑥本乙）

さらに、これらの相互関係に目を向けると、(2)は冬に小野を訪れる  
薫の使者に関する描写を③④⑥の三本のみが「雪きり」を分けてや  
ってきた、と誤写する。ここで気に掛かるのが、他本の中でも②九  
条本のみが「あられ」を、三本の中で③筑波本が「きり」を、それ  
ぞれ漢字表記する点である。「あられ」から「きり」への直接の誤  
写は考えにくく、漢字表記「霰」から「霧」へと誤写、さらに「霧」  
を平仮名表記する伝本が派生したと見るべきであろう。このことか  
ら（②）→（③④⑥）という伝本の派生が想定できるのである。

しかし、(3)のように③以下三本が単なる誤りとは認めがたい独自  
異文を持ち、さらに【表 1】②九条本独自の異文もあることから、  
②と③以下三本に直接の親子関係は想定できない。②と兄弟関係に  
ある本が祖本となり③以下三本が派生したと見るべきであろう。

以上の検討から②④⑥の関わりを想定し、仮に図示しておく。

【図3】



四 京大本・書甲本・松平本の関係

続いてⅢ〔⑦京大本／⑧書甲本・⑨松平本〕について検討する。

【資料9】

(1) 今までかくあるにもあらぬなまながら〔三十六オ・6〕

やう〔⑦京・⑧書甲・⑨松〕

(2) なけきはれつ、あやしきにうつるひるたりしに〔二十七ウ・8〕

あやしき所〔⑦京・⑧書甲・⑨松〕

(1) は他本の表記がおそらく原形で、⑦～⑨は「さま」を「様」と漢字表記する伝本を祖本とし、それを誤って「やう」と読んだのである。 (2) は右近が浮舟亡きあと移住した場所を示す記述で、他本の「あやしき」よりも⑦～⑨の「あやしき所」の方がより理解しやすい。(2)のように、他本よりも優れていると思われる例も稀にあるが、総じてこれらの誤りが多く、問題のある伝本を共通の祖本として成立した可能性が高いといえよう。

さらに三本の相互関係を確認しておく。

【資料10】

(1) 尼君いとわかくしき御さまかなとてひきときてみせきこえ給

ふ〔二十五オ・7〕

はかくしき〔⑧書甲・⑨松〕

(2) タつかた大将の君兵部卿の宮にまいり給へるに〔五十一オ・2〕

わたり〔⑧書甲・⑨松〕

どちらも⑧書甲本・⑨松平本のみが異なっている。この二本は「表2」のように細かな点で多くの共通異文を有しており、近接した関係といえる。なお、【資料1】⑨は⑧が持たない大きな欠落を複数持ち、【表1】のように独自異文も多いことから、⑧の方がより祖形に近い本文であるといえる。

しかし、次のように⑧書甲本が独自異文を持つ例も複数見られることから、⑧から⑨松平本へという直接の親子関係は想定できず、兄弟関係に当たると考えられる。

【資料11】

(1) 尼君ざらぬあまたちあはれにおしくかなしと〔四十四ウ・7〕

ナシ〔⑧書甲〕

(2) なつかしうきこえてしめくと物あはれなるに〔十八オ・1〕

しめくとして〔⑧書甲〕

次に⑦京大本の性格を確認する。【表1】独自異文を数多く持つが、中でも特徴的なのは、次の(1)のように「む」から「ぬ」、ある

いは「ぬ」から「む」へ誤写し、「く敷」という不審を示す傍注を持つ例が複数ある点である。

【資料12】

(1) ことつてやらんことのはもおほえす (七オ・五)

ぬ<sup>家</sup> (⑦京)

(2) けぬるうへにふりそひつ、いくへかしたにうつもる、みれのか

よひちなかめいてたるに (四十七ウ・八)

ふりそへ (⑦京)

(3) き、いてたまひてあはれとおほして (二十七ウ・八)

給ふ (⑦京)

また(2)のように「ひ」を「へ」に、逆に「へ」を「ひ」に誤る例、(3)のように「たまひ」を「たまふ」と表記する例も見られる。これらの異文数をまとめると次のようになる。

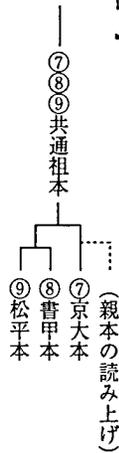
他本	↓京大本	用例	うち傍注を持つ例
ぬ	↓む(心)	十例	二例
む(心)	↓ぬ	八例	二例
へ	↓ひ	二例	
ひ	↓へ	七例	
給ひ	↓給ふ	五例	

\*その他「く敷」という傍注二例

このような例が数多いことから、⑦京大本の成立に際しては、読み上げによる書写が介在している可能性が高いと考えられる。

以上の検討から⑦く⑨の相互関係を仮に図示しておく。

【図4】



次に、このⅢ (⑦京大本／⑧書甲本・⑨松平本) とⅡ (③筑波本・④祐徳本・⑥本乙本／⑤本甲本) との関わりを確認しておく。先に見たように、この二群の中間的な伝本として⑤が認められる。

【資料13】

(1) かの君うこんといひしもし、うなともほとなく后宮にまいりてさふらひけれと (二十七ウ・五)

ナシ (⑤本甲・⑦京・⑧書甲・⑨松)

(2) かのいまはときえたまひしよひのほとかきつきたまへりしことなともいまはと世をおほしなりけるとこそ (二十九ウ・五)

うせ (③筑・④祐・⑥本乙)

きこえ (⑤本甲) ・聞え (⑦京) ・きこえ (⑧書甲・⑨松)

\*⑥本甲本の傍注は③④⑥に近い伝本によると考えられる(2)は浮舟が入水した夜に書き付けたことが「いまはと世をおほしなりける」すなわち死をほのめかす内容であったという記述である。これは「源氏」に、

言はまほしきこと多かれど、つつましくて、ただ、

のちにまたあひ見むことを思はなむこの世の夢に心まどはで  
 誦経の鐘の風につけて聞こえ来るを、つくづくと聞き臥したまふ。

鐘の音の絶ゆるひびきに音をそへてわが世つきぬと君に伝へよ

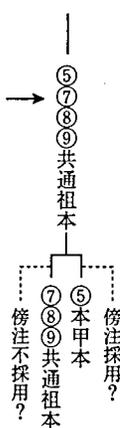
持て来たるに書きつけて、 (浮舟⑥一九五)

とあるのをふまえたものであろう。すなわち⑤・⑦・⑨の「きこえ  
 たまひし」では文意が通らず、これら四本の誤写といえる。

このように⑤・⑦・⑨は近接しており、かつ他本に対して下位に  
 位置することが認められるのである。

しかしここで問題となるのが、⑤は③④⑥と共に改変・補入の傾  
 向が見られたのに対し、それを⑦・⑨は全く受け継いでいない点で  
 ある。そこで、ひとつの可能性として、⑤・⑦・⑨の共通祖本は一  
 連の補入を傍注として有しており、それを本行化したのが⑥、傍注  
 を採用しなかったのが⑦・⑨の共通祖本であったとは考えられない  
 だろうか。現在のところそのような傍注本は見つかっていないが、  
 本文異同の様相を考慮し、一つの仮説として提示しておきたい。

【図5】



\*傍注本(資料1)A・資料7等を記すか?

おわりに — 伝流系統の想定 —

最後に二類本全体の派生の様相について考えたい。その際に参考  
 となるのが次のような例である。

【資料14】

(1) さはかりこちたかりし御くしのみしかくそかれたるも五重すき  
 ていくゑともなく(四十ウ・7)

こちたくて(⑤本甲)

うつくしく(⑦京)

こちたく(⑧書甲・⑨松)

(2) 山さと人おほつかならぬほとに音つれたまひ(四十九ウ・9)

おほろげなからぬ(⑤本甲)

おほつけならぬ(⑦京)

おほ人けならぬ(⑧書甲)

おほろげならぬ(⑨松)

(1)は浮舟の髪の写真で、明らかに次の「源氏」をふまえている。

薄鈍色の綾、中には萱草など澄みたる色を着て、いとささや  
 かに、様体をかしく、いまめきたる容貌に、髪は五重の扇を広  
 げたるやうにこちたき末つきなり。(手習⑥三五〇)

「源氏」では「五重の扇を広げたるやう」であった浮舟が本物語で  
 は「五重過ぎていくゑともなく」と変化したことが示されている。

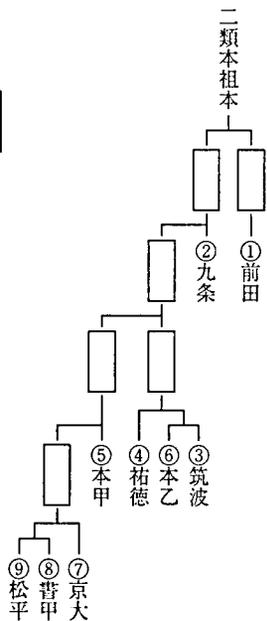
しかし⑤本甲本では「五重の扇」を「こちたくて」と誤写し、さらにそれを⑦京大本では「うつくしく」、⑧書甲本・⑨松平本では⑥の「て」を落とし「こちたく」と、それぞれ誤ったと考えられる。

また②は蕉が「山里人」すなわち浮舟が不安にならない程度に訪れた、という記述で、本来の表現は「おほつかなからぬ」であろう。それを、⑤本甲本が「おほろけなからぬ」と誤り、⑦⑨では「なからぬ」の「か」を誤脱、さらに⑤の「ろ〔巨〕」を⑧では「人」、⑦では「つ〔川〕」とそれぞれ誤写したと考えられるのである。

これらの例から、大きく①②③④⑥⑤⑦⑧⑨という転写の過程が想定できるのではないだろうか。⑤と⑦⑨が近接しており、かつ、他本に比して下位に位置することは先に確認したとおりであり、この想定を裏付けるものであろう。

以上のように九伝本の派生について検討した結果を、仮に図示したものが次の想定図である。今回の検討により、現存する二類本の中では①前田本および②九条本が善本であること、③⑥のように新たな独自補入を意図的に行った伝本群があることが明らかになった。すなわち、今後一類本との関係を検討するにあたっては、①前田本と②九条本とを相互に参照しつつ用いていくことが有用と考えられるのである。この二系統派生の問題については稿を改めて論じることとした。

〔「山路の露」二類本伝流系統想定図〕



\* □ 部分に当たる伝本は一本であるとは限らない。  
複数伝本を介在する可能性もある。

〔注〕

- (1) 本位田重美氏「源氏物語 山路の露」(昭45・笠間書院)
- (2) 刊本には「源氏物語」とあるのみであるが、挿し絵があるため、吉田幸一氏が便宜上「絵入源氏物語」と呼んでおられ(『日本書誌学大系』53(1)「絵入本源氏物語考 上」昭62・青裳堂書店、清水婦久子氏もそれに従っておられる(『版本「絵入源氏物語」の諸本(上)』慶安三年跋本の成立と出版)。「青須我波良」第38号(平元・12)および「版本「絵入源氏物語」の諸本(下)』万治版横本・無刊記小本の成立)。「青須我波良」第39号(平2・6)。
- (3) 山岸徳平・今井源衛氏「山路の露・雲隠六帖」解題(宮内庁書陵部蔵青表紙本源氏物語)別冊 昭45・新典社)
- (4) 書誌等、詳しくは別稿(『古代中世国文学』第18号(広島平安文学研究会)掲載予定)にて論じる。

(5) 前掲注(一)書。

(6) 「源氏物語」の引用は「新編日本古典文学全集」による。

(7) 山内洋一郎氏「山路の露」の語彙(「源氏物語外篇山路の露 本文と総索引」平8・笠間書院)

(8) 先に三で確認したように、⑤は③④⑥と近接しているが、③④⑥と開りの深い②とは距離がある。⑤本甲本は諸伝本の中でも特異な一本と見るべきであろう。

(9) 両本とも影印は刊行されていないが、①前田本は前掲注(3)書に翻刻されている。②九条本は日本古典全書「源氏物語」七(昭30・朝日新聞社)に附載の形で校注を加えて翻刻されているが、本文には池田亀鑑氏により校訂が加えられているので、そのままで利用することはできない。現段階では①前田本の翻刻を使用するのが最適であろう。

〔付記〕

本稿は、平成十四年度広島大学国語国文学会春季研究会における口頭発表をもとにまとめたものである。席上および執筆にあたり諸先生方より貴重なご教示を賜った。記して御礼申し上げる。

また、諸伝本の調査にあたって、ご厚配くださった本位田菊士氏、井上敏幸氏、ならびに貴重なご蔵書の閲覧を許可してくださった前田育徳会尊経閣文庫・東海大学附属図書館・筑波大学附属図書館・祐徳稲荷神社・京都大学附属図書館・宮内庁書陵部・鳥原図書館およびその関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

—— おか・ようこ、本学大学院博士課程後期在学 ——

〔参考資料〕 諸本に見られる異文数

\* 「誤脱」・「誤写」は、他本に対し当該伝本が異なる語句・表現を有する用例を指す。便宜上の呼称であり、必ずしもその伝本の誤りとは限らない。

\* 「その他」は、他本に存しない語句・表現を当該伝本が有する用例を指す。

〔表1〕 各伝本の独自異文

伝本名	誤脱	誤写	その他	計
①前田本	七〇	四七	五〇	一六七
②九条本	四三	三五	三八	一二六
③筑波本	二九	一九	一一	五九
④祐徳本	八一	六一	三八	一八〇
⑤本甲本	一四	二六	四七	八七
⑥本乙本	一〇	一四	一一	三五
⑦京大本	五二	九一	五九	二〇二
⑧書甲本	一七	一七	八	四二
⑨松平本	六二	四七	三四	一四三

〔表2〕 二伝本の共通異文

\* 空欄は該当する用例が存しないことを示す。

伝本名	誤脱	誤写	その他	計
①前・②九	四	九	一一	二四
①前・③筑	二			二
①前・④祐	一	一		二
①前・⑤本甲		一		二

⑤本甲・⑦京	⑤本甲・⑥本乙	④祐・⑧書甲	④祐・⑦京	④祐・⑥本乙	④祐・⑤本甲	③筑・⑨松	③筑・⑧書甲	③筑・⑦京	③筑・⑥本乙	③筑・⑤本甲	③筑・④祐	②九・⑨松	②九・⑧書甲	②九・⑦京	②九・⑥本乙	②九・⑤本甲	②九・④祐	②九・③筑	①前・⑨松	①前・⑧書甲	①前・⑦京	①前・⑥本乙
—	—		三	—	—		—	—	二		二	—	二			—	三	—	—	—	二	
—	—			二	二			七		二	二		—		—	—					二	
			—	三				五			—				—	—					—	
二	二		四	六	三		—		一四		四	五	二		—	—	五	—			五	

	伝本名	誤脱	誤写	その他	計
①前・②九・③筑	①前・②九・④祐	—			—
①前・②九・⑤本甲	①前・②九・⑥本乙		—		—
①前・②九・⑦京	①前・②九・⑧書甲				—
①前・③筑・④祐	①前・③筑・⑤本甲		—		—
①前・③筑・⑥本乙	①前・③筑・⑦京		四		四
①前・③筑・⑧書甲	①前・③筑・⑨松				—
①前・④祐・⑤本甲	①前・④祐・⑥本乙				—
①前・④祐・⑦京	①前・④祐・⑧書甲				—
①前・④祐・⑨松	①前・④祐・⑩				—
①前・⑤本甲	①前・⑤本乙				—
①前・⑥本乙	①前・⑥本甲				—
①前・⑦京	①前・⑦京				—
①前・⑧書甲	①前・⑧書甲				—
①前・⑨松	①前・⑨松				—

【表3】三伝本の共通異文

⑧書甲・⑨松	⑦京・⑨松	⑦京・⑧書甲	⑥本乙・⑨松	⑥本乙・⑧書甲	⑥本乙・⑦京	⑤本甲・⑨松	⑤本甲・⑧書甲
四二	四		—			—	—
四二		三					
二九	一						
一一三	五	三	—			—	—



